

渦中の 農力

梨

渡部 朋利



わたなべ・ともとし
JA秋田なまはげ
果樹部の部長
と中石果樹生産組
合の組合長を務め
る。男鹿市五里合
中石地区の園地
1・6ヘクタールで、
「幸水」「豊水」「秋
泉」「南水」を栽培
している。65歳。

——今年の梨栽培は、先行きが見
通せないなかでの作業だったと思
います。

最初は新型コロナウイルスが流行
して消費が落ち込むなかで、果たし
て売れるのかという不安がありまし
た。ですが、他産地の情勢を見た
ところほぼ例年通りで推移してお
り、大きな影響はないとも聞いて安
心しましたね。

——春先の霜害と雹害も、生産者
を悩ませました。

特に「豊水」で霜害が多く見ら
れました。蕾のうちからがくが凍っ
たことが影響して、着果数が大き
く減少し、変形果も多発しました。
昨年の2割しか梨が実らない園地も
あったと聞いています。

収穫量は減少しましたが、販売
額は昨年よりも増加しました。他
産地でも出荷量が例年より少な
かったうえ、スーパーなどで客足が
伸び、市場で引き合いが強くなり
合い状態だったとのこと。来年も今
年のような価格で推移してくれる
ことを期待しながら、作業に励ん
でいきたいものです。

単価がある程度安定すると、担
い手の定着にも繋がると思っていま
す。千葉などの先進地の農家に伺
うと、農家が各々で選果設備を持
てるくらい価格が安定し、固定客
がしっかりついているうえ「来年子
どもが戻ってきて継いでくれる」と
いう話もよく聞きます。「梨をどの
くらい手掛けると、このくらい稼ぐ
ことができる」といった目途が明確
になると、若い人がもつと取りかか
りやすくなるのではないでしょう

——JAの梨の担当職員からは、
梨の色つきが鈍い年だったと聞きま
した。

たしかに全体的に黒ずんで、いく
ら経つても色がつかない印象でした。
日焼けも多くありましたね。暑さ
の影響では、「南水」に多く見られ